
魔法少女リリカルなのはA's 夜天に昇る朧月は輝き続ける

作者月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA's 夜天に昇る朧月は輝き続ける

【Nコード】

N61370

【作者名】

作者月詠

【あらすじ】

はやての代わりにオリキャラをねじ込んだリリカルなのは！

第零話 プロローグ（前書き）

注意！

はやては出ない

作者は中二病

主人公が謎過ぎる

シグナムは俺の師であり姉であり嫁である。
ハーレムである。

以上がダメな人は即退散してください。
では…

第零話 プロローグ

俺は本が好きだった。

もちろん、今でも変わらずに好きだ。

魔物を倒す勇者の話

逆境を覆す話

魔法使いが闊歩する話

王子と姫が幸せに暮らす話

平凡な少年が、非常識な世界に巻き込まれる話なんてのも在った。

もちろんSFものやアクションものも大好きだ。

怪奇ものを読んだ日には夜トイレにいけなかったな…

大体がハッピーエンドに終わる物語。

俺だってハッピーエンドは大好きだ。バッドエンドは本当に勘弁だよ。

そしてそんな子供の頃からの夢…と言うより願いは、

？『世界中の人生が幸せになります様に』
モノガタリ ハッピーエンド

この十六年間思い続けた事だ。

皆、俺みたいな悲しい出来事が起きても…それでも俺は願ひ続ける。

？『せめて、俺以上に幸せに…』

第零話 プロローグ（後書き）

次回

第一話

『ヴォルケンリッター』

乞うご期待

第一話 ヴォルケンリッター

コノエザカ
近衛坂 凜

それが俺の名前だ。

両親と姉を亡くしてからというもの、約十六年余りが過ぎた。

良くしてくれるのは俺の幼い頃からの担当医、《石堂 インドウ 真由利 マユリ》と、三日月商店街のみんなだ。

しかし、それでも俺の心にはクレーターどころか奈落の穴が出来ている。

『普通』ならば大抵は一人暮らしは可能だ。

しかし、この『欠陥品』の体はそれを良しとしなかった。

俺を引き取った叔父や伯母は財産目当てだからホー○アローン並みのトラップで追い出した。

しかし、生を受けて十六年…未だに分からないことが身近にある。

自室にある、金装飾の剣十字が施され、鎖に巻かれた茶色の古書である。

鍵らしいのは見当たらず、しかし古書自体は風化していない、まるで『何かを封印している様な状態』なのである。

まあそんなことはさておき、俺はこの『欠陥品』の塊みたいなこの

体の為、普通の服を着るのは難しいので普段は黒い着流しを着て生活している。

しかしこの体は厄介なことに、激しい運動は出来ず、興奮しようものならば軽度の呼吸困難に陥る。

中学までは普通だったんだがな…高校に入ってから自体が急変。それ以降は小学校、中学時代の同級生や後輩、先輩までもが見舞いに来た。

現在は姉の恩師という、老人『ギル・グレアム』が生活を支援してくれている。

さて、そろそろ話しすぎたようだ。

今日で漸く十六歳の誕生日まで後三十秒というところまで来た。

？二十

もーちよいか…

？十…九…八…

数えてると長く感じる…ふああ…眠……

？三…二…一…

おお…瞼が重い…

？零

ほとんど、眠気のまどろみに片足を突っ込んだ状態で異変は起きた。

『Ich entferne eine Versiegelung』
「闇の書、封印解除」

あの謎の古書が紫の光を放って、目の前に『浮いていた』
それも、無機質な機械音声の本から流れる。

児童用の絵本でもここまで気味が悪いのは無いぞ！

『Anang』

「開放」

その音声が聞こえた瞬間、急激な衝撃が俺を襲った。

苦しい、痛い：体が焼けるような、何かに縛り付けられるような感覚が俺を襲う。

すると胸の中心から、何かが抜き出る感覚に襲われる。

恐る恐る胸部を見ると、蒼と銀が混じったような色の光の玉が出ていた。

やがて、その光の玉は古書に吸い込まれると、古書はさらに光を放

ち、開き、凄まじい早さでページが捲られていく。

そしてとあるページで停止すると古書の後ろの床に、丸の中に三角形がある魔方陣が四種四色、現れてゆっくりと回転を始めた。

四種四色の魔方陣が光を放つと、頭を深く下げて片膝を立てて跪く四人の女性が現れた。

「【闇の書】の起動、確認致しました」

同年か少し年上くらいのピンクのポニーテールの女性が凜とした声で言い放つ。

「我等、【闇の書】の蒐集を行い、主を守る守護騎士に御座います」

金髪より少し薄いクリーム色のセミロングの女性が柔らかな声で言う。

「夜天の主の下に集いし雲」

銀のストレートに蒼い犬耳の女性がハスキーな声で言う。

「【ヴォルケンリッター】、何なりとご命令を…」

最後に、朱色の後ろ三つ編みで八〜九歳くらいの女の子が閉めに言う。

誰だ、そう言う気力も無く、俺の意識は薄れていったのだった……

第一話 ヴォルケンリッター（後書き）

次回

第二話

『家族』

「家族は遠慮しない。これが鉄則だ」

乞うご期待

第二話 家族（前書き）

第一話の闇の書の訳は想像で適当です。

第二話 家族

？月御影総合病院・・・

目を覚ますと、そこは：

「知らない：訳でもない天井だ」

「何言ってるんですか凜くん」

そこは普段見慣れた病院の病室だった。
それにこのツツコミは石堂先生か。

「いきなり吃驚しましたよ。見慣れない外人女性に抱かれて担ぎ込まれるなんて：何処の少年漫画ですか！」

「知りませんよ（汗）」

俺が短的なツツコミを入れると、石堂先生は溜息一つ。
視線を守護騎士と名乗った女性達に向ける。

「で？彼女らは？」

「あー：中学時代のホームステイ先の学校で知り合った友人達ですよ。」

着替えて驚かそうとしたんですが、いかんせん俺が倒れてパニック状態でこの恰好なんです」

この恰好：というのは、全員女性なのに黒のノースリーブとミニスカートである。

…俺にそんな趣味はねーっすよ。

俺の至高は巫女ですよ。

…とまあ、そんな訳で石堂先生に色々誤魔化してなんとか帰宅。

「すみません主…召喚早々御迷惑を…」

帰宅途中、ピンクのポニーテールの女性が申し訳なさそうに言い始める。

「別にいい。君らが俺を心配してやった事だ。何も怒る事でもあるまいに、寧ろ褒められる事だよ」

苦笑気味にそう言うと、ポニーテールの女性はキョトンとした表情になる。

迷惑が掛かろうと、それは自分の主を思つての事。

それで怒るやつは相当なココロの狭さを持った者だろうな。

「どうせ明日は日曜だ。君らの服も買わなきゃな…嗚呼、参つたな…女物は殆ど家に無いし…」

…仕方無い、最近友人になった彼女に手伝って貰うか。

「なあ、こいつ一人でブツブツ言い始めたぞ」

「どうやら私達の服を明日買う様ですね」

「よく分かったな」

「読唇術ですよ」

「…器用だな」

嗚呼、明日は忙しくなりそうだ。

？近衛坂家

寝る前に自己紹介ぐらいは済ませるか。

…という訳で現在リビングで家族会議状態。

「あー…取り敢えず自己紹介だ。

俺は近衛坂凜。歳は今日を以って十六。一応男だ」

…ってオイ。

何で皆「なん…だと…？」な顔している！？

慣れてるけどな、ちくせう…

「私はヴォルケンリッターが将、『剣の騎士』シグナム」

ピンクのポニーテールがシグナム。

将って事はヴォルケンリッターのリーダーか。

「私は『湖の騎士』シャマルです。ヴォルケンリッターの参謀、及

び回復やバックアップを担当しています」

クリームのセミロングがシャル。
確かに戦う感じじゃ無いな。

「…『鉄槌の騎士』、ヴィータ。破壊活動や蒐集が主だ」

「ヴィータ！」

「良いって良いって。騒ぎは後だよ」

「…ふん」

朱色の後ろダブル三つ編み少女がヴィータ。

…やれやれ。

「『盾の守護獣』、ザフィーラ。主に主の護衛です」

犬耳銀ストレート（毛先が跳ねてる）褐色がザフィーラか。

完全肉体派だけどさ、ヴィータが凄い剣幕でシグナムとザフィーラの『胸』を凝視している。

そして自分の胸部を見る。

…はは〜ん（ニヤリ

シャルの方を見ると、とても良い笑顔になっていた。

こちらに気付いてサムズアップしてきた。

お返しにこちらもサムズアップ。

「シャルと凜は『微笑ましく見守る親』の称号を手に入れた！！」

それから約一時間で闇の書の説明に、魔法の存在にその細かい詳細。そして俺の脆い体の原因をシャルから教わった。

偶然に偶然が重なった事実がこの体…足りない魔力を生命力で補うか。

まったく、何処の呪われた道具だよ…

はあ、今日は疲れた。

守護騎士のみんなに部屋を与え、ヴィータをシャルかザフィーラの部屋に入れようとしたら…

「…一人で良い」

…と自分で空き部屋に行ってしまった。

大丈夫だろうか…?

「ヴィータちゃんは過去の戦役で人間不信に陥っちゃって…それで……」

悲しげに顔を俯かせるシャル。

「よし、大体分かった」

「え?」

「結果は明日でるさ」

「は、はあ…?」

シャルは訳が分からないという顔をしている。
さて、部屋に戻るか。

？ヴィータの部屋

今回の主…優しそうだったな。怒られそうだったアタシを庇ってくれたし…いい、いや！アレは演技だ！どうせアタシを騙してるに違いない？？ガタンッ？？うおおああっ！？な、なな何だ！？敵か！？

音のした方を見ると、目覚まし時計が床に落ちていた。

な、何だよ…脅かすなよな。

でも…何で落ちてんだ？誰も触ってないのに…？？ガタタッ？？ひいい！？何だよ何だよ何なんだよ！！！？

こ、怖い…誰かの部屋に行こうかな…

…いや、色々ダメだろう。

シグナム…哀れみの目で騎士どうのこうの言われるだろうな。

シャマル…微笑ましい様な目で迎えるだろうな。その先は色々保障できない。

ザフィーラ…却下。無駄なく受け入れるだろうけどデケエ胸が腹立つ。

…消去法でいっても最終的に凜かよ。

…怖いよりはマシか。
…枕持ってこう。

？凜の部屋

そろそろか…？コンコン…？来たな。

「開いてるよ」

？？ガチャ…

入ってきたのは髪を下ろした寝間着姿のヴィータだった。（枕を引き連れて…）

「どうした？」

「……………」

話したいんだが理性やプライドが邪魔して口に出せないか…

「……………れ」

お？

「……くれ」

もうちょい！

「いっ…よ…てくれ…」

あと一歩！

「い、いっしょにねてくれ…！」

…これ以上は可哀相だな。

「…ほら」

タオルケットを片方上げてヴィータを招き入れる。

俺は別にロリコンではないが、精一杯背伸びする子供や素直な子は大好きなのだ。

「あのな、ヴィータ」

「…」

「俺もそうだが、他の守護騎士達も君を信賴している。君にどんな過去があったかは俺に知る由も無い…だが今は違う。

ヴィータ、今に生きろ…遠慮も無しだ。

『家族』は遠慮しない。これが鉄則だ」

「…ッ！」

やれやれ…俺が寝るのはもう少し後だな…

第二話 家族（後書き）

次回

第三話

『地下書齋』

「昔から一人じゃ何も出来なかったからな……どちらにせよ今回も力を借りる」からな」

乞うご期待

第三話 地下書齋（前書き）

大変遅れてすみません…

色々詰まりましたが、なんとか投稿まで行きました…

第三話 地下書齋

？近衛坂家（朝）

どうも睡眠時間四時間に減らされちゃった凜です。

そして…

「スー…スー…」

この甘えん坊ヴァイターを離してください…！

（退かすのが罪悪感MAXなので…）

「むにう…ふああ…おはよー、りん」

「お、おう、おはようさん。顔洗ってリビングに来な」

「…んゝ、わかったゝ」

…なに？あの可愛い生物。

ーリビング

「凜くん凜くん！」

「おはようさんシャマル。で、どうした？」

「ヴィータちゃんのあの和み様は何ですか！？」

「ふっふっふ…実は…」

掻い摘んで説明すると、ヴィータの部屋は風水的に動物霊が集まりやすいのである。

つまり、ヴィータや守護騎士の魔力に感化されて活動的になったわけだ。

「凜くん、意外に鬼ですね…」

「ちよっとした荒治療だけだね…でも良い薬になったでしょ？」

「結構凜くんも強引ですよね…」

苦笑気味に笑うシャル。

人間、少し強引なくらいがいいのさ…フフフ…

そして朝食後……

「主凜」

「シグナム？どうした」

「実は、我らの騎士甲冑の事で…」

騎士甲冑というのは、要は防護服や鎧みたいなもの。

守護騎士の四人は主からその騎士甲冑のイメージを貰って自分の騎士甲冑にするそうだ。

シャル曰く服っぱいのも良いみたいだし。

では早速………

——騎士甲冑は原作と同じです——

さてと…

「普段着どうしよう…orz」

守護騎士四人が喜んでる真横で俺は凹んでいた。
女物の普段着なんてどうやって選ばいいのさ…

— p i p i p i ♪ p i p i p i ♪

すると携帯に電話がかかってきた。

…お！goodなタイミングだ！

《もしもし、元気かい？》

「わかってて言ってるだろ、お前…」

電話の相手は【龍宮 真奈】。

小中と同級生だった近くの神社の褐色巫女で、銃火器の扱いが得意。

文化祭の時に絡んだヤンキー集団を、龍宮のデザートイーグル・5
OAE 二挺（注…エアガン）と俺のM92Fとグロック26（ア
ドヴァンス）（注…エアガン）で吹っ飛ばしたのは良い思い出。

《なんか嬉恥ずかしな回想された気がするよ》

「気のせいだと思っとけ。気のせいだ」と

…と、それどこじゃなかった。

「実は頼みがあるんだ」

《珍しいな。お前が私に頼みごとなんて》

「ちよいと裏関係だね」

《…何だか碌な感じがしないな》

「そう言うな。内容はかくかくしかじか」

《成程、それは確かに私が適任だな（小説は便利だな）》

真奈がメタった気がするけど気にしない。

そんなもって…

「キングクリムゾン！時を吹っ飛ばす！」

「何を言ってるんだ？」

ヴィータ、こういうときはスルーが一番だぞ？

「しかし、今日は真奈が居て助かった。女物の服なんてさっぱりだからな」

「何、丁度私も暇だったんだ。なかなか楽しい時間だったよ、凜」

しかしまあ…中学から変わらないな。真奈のクールさは…

「私も助かりましたし…ね？ シグナム」

「ああ、それに龍宮もなかなか信頼における人物だ」

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

ちなみに、会話に参加していないヴィータとザフィーラは…

「♪」

商品名、ノロイウサギというぬいぐるみと小学生用ノロイウサギバッグを買ってもらって頗る上機嫌で…

「…♪……♪」

犬耳型(?)ヘッドホンでePod・nanoで音楽を聴いてる。
ミズキニヤナという歌手??こちらで言う水樹さんです??の歌らしい。

「じゃあ、私はこれで失礼するよ」

「おう、またな」

「また今度」

「また会おう、龍宮」

「今日はありがとうー!」

「感謝する」

さて、今日のお昼はどうしようかな?

?Side out

?Side 龍宮

凜やヴォルケンたちと別れてしばらく…未だに尾行する一つの影に
問い掛ける。

「何時までストーカーするつもりだい?」

「…気付いていたか」

…何とも悪趣味な仮面？？原作と同じです？？だね…魔力で身体強化してるし。

「近衛坂凜に近付くな。そうすればお前は不幸に見舞われる」

「残念だが、彼は私の中学からの親友なんだ。おいそれと離れられないし、ストーカーとは頂けないな」

「ならば、力付くで…ッ！」

瞬動で仮面の男の懐に入り込み、喉元に銃を突き付ける。

「今のを反応できなかったお前では私に勝てないよ」

「…まさか、褐色の肌に黒い長髪…『鋼鉄の嵐』、龍宮真奈か！」

「高々、魔力で肉体強化してるなら諦めろ。

私の一部の弾丸には体内の魔力を暴発させる代物があるからな」

無論、強固な魔獣用だがね。

「くっ…」

「けど…今日は見逃す。

機嫌が良いんだ。…だが、次は問答無用で蜂の巣だ。覚えておけ」

仮面男は舌打ちをして転移で逃げて行った。

やれやれ…凜も厄介事に好かれてるなあ…

—Side end…

—Side. 近衛坂

「帰って来て早々悪いが、今日は地下に有る父さんと母さんの書斎を掃除する！」

今までは一人でやっていたから人数増えて楽だよホント。

?地下書斎

「…この図形…魔方阵ですか？」

「あー、それは『錬成陣』。その図形に構築式を組み込んで云々…」

「主凜、この…「ゴスン…」大ききの割に重いトランクは何処へ？」

「その端っこで良いよ。でも気を付けてね？一応それ生きてるから」

「…え？」

「主、この『精霊魔法大全』と『技術魔法大全』は…」

「精霊魔法は右から三番目の棚の上から三段目、技術魔法は左から五番目の棚の上から二段目」

「「…って、何ですかこの異能の数々!」」

「おお…いや、実は俺にもよく分からない。覚えてるのは…?」

『転生も悪く無かったな!』 『そうね…そうだわ! 凜にも残してあげましょうか。色々』

「?…?…だったかな?」

作者

(読者はお気づきだろうか…そう、近衛坂夫妻は幼馴染同士で転生チートだったのだ! 能力は『ネギま!』、『鋼の錬金術師』、『アスラクライン』である!)

「何だか変な解説が…?」

「どした? シグナム。そんな惚け面して」

「いや、気にしなくていい」

「ふん…」

シグナムにヴィータ。世の中には『知らぬが仏』という言葉が在るのだよ…

「この家はまるでビックリ箱だな…うわっ!」

ヴィータが壁に寄り掛かると、その壁が開いて薄暗い蛍光灯が灯っ

た螺旋階段が姿を現した。

「…本当にビックリ箱みたいですね」

シャルの言葉に全員が頷く。

—全員階段降下中：—

「これは…デバイス調整用の機材!？」

シャルが地下の部屋に入り、電気を点けると中にある機材に驚愕した。

「これなら一気にカートリッジの充填が捗る…!」

凄く嬉しそうだ。

……………。

「なあシャル」

「何ですか？」

「こいつの操作方法を教えてくれ」

「り、凛くん？」

戸惑った様な表情になるシャル。
シグナムとザフィーラも同じ様な顔をしている。

「シャマルだけだと大変だろう。それに、主と言ってどっかり座ってるつもりは無いよ。
それが――」

――俺の考えるお前たちの主だ」

「り、凜くうん！」

「主凜！」

「主いい！」

「凜！」

俺が言ったら守護騎士たち全員が涙目で突っ込んできた…って！

「全員で飛び込んで来るなああー！」

次に目を覚ましたのは真夜中なのは言うまでもなかった…

――真夜中・近衛坂家地下室

ペンライトで地下に降り、地下室の電気を点ける。

俺の手には闇の書がある。

「なあ、闇の書。お前はロストログアって危険なモンらしいが…俺にはそうは思えない。

…かと言って、この欠陥品だらけのこの体で出来ることは高が知れている…。

昔から一人じゃ何もできなかったらな…どちらにせよ今回も『力を借りる』からな。

覚悟しとけよ？ 闇の書」

目の前に浮かぶ闇の書は、ドクン…と呼応するように闇の書の胎動を感じた。

さて、明日から色々忙しくなるな…

第三話 地下書齋（後書き）

次回

第四話

『歌と少女』

「The defect is filled with mys-
elf.

「我が身は欠陥で満ちている」

第四話 歌と少女（前書き）

今回短めです。

はやてポジションで友だち（？）と言えはあの方ですよね。

第四話 歌と少女

—Side. 凜

今日は週に一度の読書日である。

朝ごはんは既に作っておいたし、書置きもしたから大丈夫だろう。

—近衛坂家

「あるじいいい！何処ですかあああ！？」

「凜くん、これは誤解されるわ…」

「凜も天然…なのか？」

「さてな…」

「今日は夕方まで捜さないでね？ b y 凜」

大丈夫ではなかった。

（約一名）

さて、今日は何を読もうか？

ソロモン王の冒険？

ケルト神話物語？

北欧神一家の事情？

ああ、迷うなあ…♪

…おや？あれは…

「やあ、すずか嬢」

「あ、凜さん。おはようございます」

「ああ。おはよう」

この子は【月村すずか】。

聖祥小に通う小三の女の子だ。

ちなみに俺の後輩でもある。

「凜さん、今日は早いですね」

「それを言うならすずか嬢もだろう？小学生が朝から図書館とはな」

「今日は稽古が全部おやすみなんです」

えっへん！…というくらい胸を張るすずか嬢。

ちなみにこの口調は商店街と家以外での外用口調だ。

「それで、すずか嬢は何を読む？」

「今日は『聖剣物語』の下巻ですかね。上巻がすごい面白かったの
で…」

「楽しんでもらえて何よりだよ。おっと、開いた様だ。行くとしよ
う」

「はい！」

言っておくが、俺はロリコンじゃないぞ？

——— そんなこんなで夕方だぞ諸君 ———

「はぁ…♪堪能しました！」

「うむ。実に有意義な時間だった…♪」

ホクホクした感じで帰り道を歩くすずか嬢と俺。
そして知らず知らずに俺は口ずさんでいた…

「The defect is filled with myself.

我が身は欠陥で満ちている。

The body collapsed, depleted blood.

身は崩れ落ち、血は枯渇する。

Death many times over the days of the close.

幾度の日々を越えて死は迫る。

The student is now in its end, only one,

ただ一度の生は終りを迎え、

Come to an end, only one even death.

ただ一度の死さえも終焉を迎える」

「あの、凜さん？」

すずか嬢が訝しげな顔で俺を見上げる。

「あ、すまん…：ついつい」

「いえ、気にしないでください。それより、その歌は…」

「∴この歌は、文字通り欠陥品に満ちた自分を哀れんでいた時期に作った歌で、気付くと時偶に口ずさんでしまうんだよ」

「あの、続きを聞かせてくれませんか？」

「∴ああ。了解だ、お嬢様」

そして再び歌いだす∴

「The defect is filled with my
elf.

我が身は欠陥で満ちている。

The body collapsed, depleted blood.

身は崩れ落ち、血は枯渇する。

Death many times over the days
of the close.

幾度の日々を越えて死は迫る。

The student is now in its end,
only one,

ただ一度の生は終りを迎え、

Come to an end, only one even
death.

ただ一度の死さえも終焉を迎える。

Who mourn his death and
back at the hill of corpses
at all times.

彼の者は常に死と背合わせ 屍の丘にて慟哭する。

Thus, life is looking for
hope.
故に、この生涯は希望を求め。

Its body is surely a perfect
first.

その体はきつと、完全を渴望した」

短いながらも、その体を嘆き、完全な体を渴望した思いの塊。

…我ながら女々しいねえ。

そのとき、俺は気付かなかったが…すずか嬢は、とても寂しい顔をしていた。

なお、帰ったらシグナムにこってり絞られた：

第四話 歌と少女（後書き）

次回

第五話

『デバイスと喋るネコ』

「この刹那の幸せが、一秒でも多く続けばいいな…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6137o/>

魔法少女リリカルなのはA's 夜天に昇る朧月は輝き続ける

2011年10月7日00時47分発行